

# コロナ禍明けての結の屋根葺き

大野郡白川村教育委員会

## はじめに

令和5年5月13日（土）白川村の世界遺産荻町合掌集落内の明善寺庫裡において結の屋根葺きが実施されました。令和2年よりコロナ禍に突入し、5年ぶりというかなりの期間が空いての結となっていました。当日は160人の村民の参加で実施され、久しぶりに集落内に「ホーイ、ホイッ」とカケヤを振り下ろす掛け声が響き渡り、ようやくコロナも明けたなと実感できた一日でした。明善寺では平成8年の東面の屋根葺き以来で、今回の西面の屋根葺きも大泉住職の強い思いで結の屋根葺きが実現しました。



## 1. 若手の屋根葺き技術育成

今回は期間が空いての結だったため、事前に若手住民を対象とした屋根葺き講習会を地元の住民保存会、白川郷荻町集落の自然環境を守る会（以下守る会）主催で実施し屋根葺き本番に臨みました。合掌造りでは屋根葺きの際に合掌材とヤナカ（母屋材）を結束する縄も一緒に取り換えますが、その「ハコ巻き」の結び方や、茅を押さえるヌイボクの留めかた等を研修しました。研修を受けた若手の中には初めて屋根葺きを経験する世代の研修生もいて、職人さんから一生懸命縄の結び方を習っていました。久しぶりの結の機会です事前に意識を高めるためにも良い講習会となりました。



## 2. 結の屋根葺き当日

5月13日の屋根葺き当日を迎え朝8時前に続々と村の人々が集まってきます。施主である大泉住職の挨拶のあと、赤い法被を羽織った世話役の方の説明があり、各々持ち場につきます。若手を中心に屋根に登れる人は屋根にとりつき、その他の人たちは軒下から屋根に茅を送りだします。白川村ではふるさと教育の一貫として結の屋根葺きの際には白川郷学園の生徒に参加を促し、公募制で屋根葺きに参加してもらいます。今回も29名の生徒が参加し、大人たちに手渡しで茅をバケツリレーしていきます。

今回の屋根葺きで印象的だったのは、屋根の内側で作業をする「ハリサシ」の持ち場での若手の姿勢でした。ハリサシは通常経験のある熟練年長者が入りますが、そこにハリサシ未経験の若手がついて積極的にハリサ



シのやり方を習得していました。ハリサシというのは茅を押さえるヌイボク（押し鉾）とクダリ（垂木）を結束するための縫い縄を屋根の内側で受け取ってクダリに縄をかける役割の人です。ハリサシは屋根の内側からヌイバリを外側のヌイボク付近に目がけて刺し、外側の葺き師がヌイボクにかけた縫い縄をその針先に通し「あーい」と言っ



て針先をたたいてオッケーの合図をだします。内側のハリサシは合図を受けてハリを引き抜き、クダリ（垂木）に縄をかけて再度外側にハリを刺し外側の葺き師に縄を渡します。ハリを刺す際に外側のヌイボクの位置にあたりをつけるのが難しく、若手は年長者に聞きながら熱心に取り組んでいました。

外では葺き師が縄を引っ張りヌイボクを足で踏んでカケヤで叩いてもらい縄を絞め「ワサン」と「ツノ結び」という結び方で縄を結びます。その「ワサン」と「ツノ結び」の結び方も事前の屋根葺き講習会で研修したため、そこで教わったことを思い出しながら若手が頑張っている姿が見られました。

### 3. 現代社会における結の存続の難しさ

今年は久しぶりに結の屋根葺きを実施することができましたが、以前と比べると結の屋根葺きを実施していただける家が少なくなってきたことは否めません。これは単に白川村だけの問題で片付けられるものではなく、現代の社会の問題と併せて考えていく必要があると思います。地域のつながりや隣人との関係性が薄れていく一方で SNS 等のネットメディアを主体とした相互交流が主流になりつつある日本の社会の中で世代間の考え方の違いというのは我々の想像を超えるものがあると思います。結のみで屋根の葺き替えを実施していた五十年前の社会の状況とは全く変わってしまっている現代において、かろうじて今のやり方で結が実施できていること自体、奇跡的なことではないかと感じています。なのでこの状況を逆手に、唯一残された結の屋根葺き文化を積極的に村の魅力として発信していくという、今までとは別の視点で結の価値を共有して取り組むことも必要だと考えています。

### 4. 白川郷学園のふるさと学習

白川村では将来の担い手の土台を学ぶ学習として村民学に取り組んでいます。その村民学の中のふるさと学習の一貫で4年生が毎年合掌造りをテーマに学習します。授業は主に「①実物合掌造り見学、②屋根葺き現場で生の職人さんの声を聞く、③茅場等資材確保の現場見学、④合掌造りの伝統的な縄の結束方法「ハコ巻き」の習得、⑤最後に合掌造りの実物と同じ原寸の小屋組み模型を、茅葺き職人さん指導のもと、ハコ巻き技術を使って組み立てる。」といったことを行っています。最後の組み立ての授業では大勢で一つのモノを作り上げる結の共同作業の魅力や大切さに意識をもってもらえるよう、友達と常に声を掛け合っ

